

はなび あがった？

「うあ、暑いっ！」

理科室に入ったとたん、すごい暑さが襲ってきた。夏休み二日目は、ラクロス部の練習日。化学部も活動日だから、練習終わってエアコン入りの理科室に涼みに行った。つもりだったのに。

「ええ。暑いわね」

中にいたのは、ほのかひとりだけ。窓開けっぱなしで、机に向かつてなにかやってるけど。なに、この暑さ？

「ほのかあ、エアコンかけないのあ？」

理科室のとびらにつかまって、なんとか耐えてたけど

「いま、冷やしちゃいけないことしてるから」

そっかあ。化学部も楽しくないんだな。あれ？

でも、

「それにしちゃ、普通の声じゃない？　って、ほ

のか。なに、その首のこと」

ほのかの首、ブラウスの襟の部分がパタパタ動いてる。

「ん？　ああ、これのこと？」

ほのかが立ち上がったら、ブラウス全体がパタパタ　　なんだろっ？

考えてる間に、ほのかがスカートのすそ、ちょっと持ち上げた。ちっちゃな扇風機が、風おくってる

って、スカートに扇風機い！

「ほのかあっ！　あんた、それ女の子のすることじゃないっ！」

「ん。でも、男の子だとできないんじゃない？　スカートはかないし」

いや、そりゃたしかに、そっ、だけであ

「そうじゃなくてっ！！」

思わずどなっちゃったけど、ほのか、くすくす笑っ

てるよ。

「なぎさは『女の子』に夢を持ちすぎよあ」

むっ。わゝるかったわねえ。

「あたしは女の子だよっ!!!」

「わかってるわよ。でも、ねえ?」

『ねえ』じゃないってば!

「だいたい、このくらいの暑さなんて、体きたえれば済む話じゃない」

むん、って力こぶ作ったら、ほのかがペロツって舌出した。

「わざわざ理科室まで涼みに来た人に、言われたくありません」

なあにいゝ!?

「きやあ〜♡」

ああ、また喜んでるよ。まったく。

それにしても、夏の盛りには化学部で作業かあ。そりゃああたしだって、夢中になってるもの、あーだこー

だ言われたらやけど

ほのかだったら、ぜんぜん外で遊ばないじゃない。たまに出たと思えば図書館だしさ。

来週は化学部も合宿だっていうけど、それだけ? 花の乙女が夏の太陽浴びなくてどーするっていうのよ。

「やっぱ、あたしが連れ出したほうがいいのかなあ?」

理科室逃げ回るほのか追いかけながら、あたしは思わず口に出して考えてた。

『運動といえは、犬の散歩だけでもんね。健康な中学生としちゃ、どうかと思わない、志穂?』

おフロ上がりにとった電話は、なぎさからだった。珍しいなあ、って思いながら話したら、いきなり話題はほのかちゃん。仲いいなあ、まったく。

「それでそれで?」

5 はなび あがった？

『でね、焼きほのかしようかなって』
ぷっ！思わず吹いちゃったじゃない。

「焼きほのかぁ!？」

『そう。焼きほのか計画う〜。へへへ、とりあえず、合宿前に1日部活なしの日あるでしょ？プールか海で焼いちゃおうかな、って』

なぎさのセンスって、どうかズレてるんだよねえ。でもさ、

「でもでもでも、なんかもつたいないなあ。ほのかちゃん、すっごく白くてきれいなのに」

ありゃ？ 黙っちゃった。なんだろ？ なぎさが肌の色で好き嫌い決めるわけないし

「ねえねえ。犬の散歩って、体力いるよあ？ そんな無理にきたえなくっても、いいと思うけどあ？」

なぎさってば、まだ黙ってるなあ。お〜い、切るぞ〜。

『 あたしたちの、普通の夏っての味わってもらいたいな、って思うんだ。もちろん、ほのかの普通

の夏も楽しみたいよ、あたし』

な〜んか、隠してる感じだけども。まあ、どこかいつしよに行きたい、ってことだよな。

「ほのかちゃんさあ、海とかいきなり誘っても、行かないような気がするなあ もっと、誘いやすいところからすれば？」

なんだか、変な感じだあ。これじゃ、デートの指導してるみたいだよあ。

ま、いいや。とことんいつて あ、そ〜おだ♡
「そうそうそう！ ほら、明日の花火大会、ちょう

どいいんじゃない？」
会場が、ほのかちゃん家から近いんだよねえ。そ

れに、たしか
「そっか！ ありがと、志穂。それじゃ準備するから、また明日ね!!」

ありゃりゃりゃ？ 切れちゃったよ。しっかたないなあ。

なんか最近のなぎさ、ほのかちゃんのことばっか見

てる気がするよ。なんかあったのかな？
それにしても。

まあ、

「焼きほのか、かあ」

健康になるように、ってだけなら、お節介ななぎ
さらしいんだけどね。

でも、唇はずくっとラクロスの練習で疲れてるはずなのに、夜には花火で、ちよつと空いた休みに「プールか海？ これじゃ、夏休みが一週間しかないみたいじゃない。」

「なにあせつてんだろ、なぎさつてば」

「はあ ありえな〜い」

やっぱり、花火にはゆかただよなえ。って思つて部屋の中あさつてみたんだけど

「う〜ん」

部屋の床の上、ゆかたが3枚並んでる。

「さすがに、もう着れないかあ」

あたしのおなかには、リボンみたいなオレンジ色のつけ帯。パジャマ脱いで下着だけになってるのに、やっぱりキツすぎよ。

「前に着たのって、小6だもんね。そりゃ無理か」

ブルルルル プルルルル

あれ、電話？ あ、そうか。さっきまで志穂にかけてたから、子機持つてきちゃつてたんだっけ。

「はいはい。すぐ出るわよ はい、美墨です」

『ああ、なぎさ？』

なんだ、ほのかじゃない。ちようどいいわ。花火さそつちやお。

ほのかにちよつと待つてもらつて、キツついつけ帯はずして床に投げて ふう。一息ついて電話持とつとしたら、いきなり目の前のドアが開いた。

「お姉ちゃん、電話こつちで鳴つて」

え？ 亮太？

7 はなび あがった？

「こら！ 入るんじゃないっ！」

「まったく、いっつもノックしないで入ってくるんだからあっ!!」

「お姉ちゃんの着替え見たって、ちつとも面白くないよ。ほのかさんだったら」

「ちよつとまで、亮太っ!!」

「痛いっ！ いたたたたっ!!」

「コブラツイスト、今日はシャツも着てないから、思いつき決められるわ。」

「もう一度言ったら、冗談でも許さないからね！」

「ギブとか言ってるけど 今日という今日は思い

知らせなきゃ！」

「いっい？ 女の子の着替え覗くなんて、最ッ低だ

よ！ 他人のはもちろん、姉弟でも、恋人でも!!」

「こ、恋人でも？」

「そうよ！ キスするのと同じ。だまし討ちは絶対ダメ！ お互い信頼してこそなんだから！」

「あ、思わず力入っちゃった。なんか、ペキッって音

したような

「さ、わかったらさっさと出てく！」

「はあい、なんて言いながら、亮太が部屋を出てった。ふう。ああ見えても丈夫なんだよね。」

「あれ？ ベッドの上でなにか光って あ、いっけない。」

「ごめん、ほのか！」

「ほのかからの電話、ほっぽりっぱなしたんだ。」

「ううん、いいのよ。いい言葉聞けちゃったし♡」

「あれれ？ あたし、なんか言ったっけ？ まあ

いいや。本題、本題、と。」

「ほのかさあ、あした花火大会あるでしょ。いっしょ

に行かない？」

「花火!?!」

「な、なに、この驚き方!?!」

「なぎさ、ありがとっ！」

「え、と。 え？」

「ああ、助かるわ。やっぱり、持つべきものはいい

友だちね♡』

「こ、こんなに喜ばれるなんて、思ってたなかったよ。なんかテレちゃつな。」

『それじゃ明日、学校で。お願いね♡』

あれ、切れちゃった。でも、変なこと言ってたなあ。

『お願い』って なんのこと？

翌日は、朝から練習練習。なんだかいつもよりペー
ス早くって、あたしは途中ですっ転んじやった。こん
なので、午後まで持つのかなあ。なんて思ってた
ら、お昼の鐘といっしょに、いきなり解散、だって。
午前中だけ？ そんなスケジュールだったっけ？

すりむいたひざ洗って、バンソココつけて、部屋に
戻ったら誰もいなかった。

何か飲んで一休みしよ、って思ったんだけどなあ。
志穂も莉奈も待っててくれないなんて、友だちがい

ないなあ、もあ。

着替えても行くところないし、しばらく、ぼーっと
しながら歩いてると、いつの間にか理科室に近づい
てた。もう習慣だね、これは。

ま、いつか。またピーカー紅茶でもごちそうにな
るっと。でも、今日もエアコン切ってたらずだ
なあ。

そんなこと考えながら歩いてたら、廊下の奥から
なにかやってきた。

「あ、なぎさあ〜」

ほのかの声だ。よくよく見てみると、なんだかい
ろんな荷物といっしょに台車に乗って、押してもらっ
てるよ。

ああ、荷物が落ちないように、台の上で押さえて
るのが。かる〜い、ほのかならはだよ。これが
あたしだったら いや、考えない考えない。あた
しの体重は、ラクロスに必要なものなんだから。

9 はなび あがった？

「おねがいね。」

あれれ？そのまま通り過ぎちゃった。おねがい、って いったい、なに？

「ちよつとなぎさ！ ぼーっとしてないで、手伝いなさいよ。」

え？

いきなり言われたけど、この声、どこから？

「どーこ見てんの。こっちー。」

台車を通り過ぎたところから って、あれれ？

「莉奈に、志穂も？ なんてほのか運んでんの？」

ありゃ。ふたりとも、目まるくしてるよ。

「あれあれあれ？ ひよつとして、なぎさ聞いてなかった？」

え？ なにを??

「そついや、バンソコ貼りに行ってたっけ あのね、なぎさ。今日の花火大会に、化学部の花火も打ち上げるんだってさ。」

「それでそれで、その機材運び、ラクロス部が手伝

うことになったの。」

な〜んだ。あたしがいない間にそんな話があったんだ。でも、

「へ？ なんでウチが？」

あたしが言ったとたんに、ふたりが台車の前に回った。台車の上のほのかの肩に、ふたりで手を置いている。

「それはねえ。」

「ほのかちゃんの、ご推せーん！」

ああ、そついうことね。

「ごめんね、なぎさ。乱暴に扱っちゃいけないものだから 力があって、信用できる人たちって、他にいないのよ。」

莉奈と志穂が、ほのかの上で顔見合わせてテレ笑いしてるよ。はいはい。ま、そつまで言われちゃ、やらないわけにいかないよね。きのうの電話、そついうことだったのか よあしー！

「それで、あたしは何すればいいの？」

学校からワゴンタクシーに揺られて、花火会場まで移動。あたしたちは、ひとつづつ箱をかかえて、後ろの席に座ってた。

一番後ろのあたしの隣にほのか、前の席には莉奈と志穂。箱はそんなに重くないんだけど。ねえ。

「ほのか、ちよつと訊いていい？ これって」

「多分、想像してる通りだと思っけど」

ああ、苦笑いしてるよ。そっか、あたしたち人間クツション、ってわけか。

「大丈夫よ。危ないから、って、あまり大きなのは作らせてもらえなかったから。ちよつとぶつけたくらいじゃ、爆発はしないわ」

言い方が、なんだかヤケっぽい。ほんととは、もっと大きな花火作ってたのかな？ うん、思い

出になるもんね。なんでも、思いつきりやつといたほうが

「ねねね、なぎさ。なぎさは、どんなゆかた？」

莉奈としゃべってた志穂が、いきなり後ろ向いたんで、あたしは思わず目え丸くしちゃった。ええとゆかた？

「莉奈ったらね、ブランドゆかたなんだって！」

別にブランドで決めたわけじゃ、とかブツブツ言ってるけど、なんか言いわけっぽいぞあ、莉奈。

「あたしは前と同じ、赤いのだよ。で、なぎさは？ 去年は着てなかったよね？」

はあ。そうだった。

「残念だけど、今年もなしよ。うち、だれも着付けできないから買ってないんだ」

小学校のころは、つけ帯でなんとかなったんだけど、昨日のキツイ帯思い出してげっそりしたら、着付け？ それならわたし、できるわよ」

って声。

「ほのかが!？」

思わず言っちゃったけど、よく考えれば当たり前

11 はなび あがった？

か。いつも和服のおばあちゃんと、いっしょに暮らしてゐるんだもんね。

「なぎさがよければ、だけど わたしのゆかた、着てみない？」

ほのかの？ そりゃまあ、ほのかだったらゆかたの2着や3着、持つてるだろうけど 痛ッ！

考えてたら、前の席からクロスの柄が伸びてきて、あたしをついた。ああ、志穂たちの声が聞こえるみたいだよ。『借りちゃえ借りちゃえ』って。

「いいの？」

「いいわよ。この花火置いてきたら、あとは見るだけだし。帰りに家で着替えましょ♡」

花火師さんに花火を預けたところで、莉奈たちと別れた。ほのかの家までは、歩いて15分。

忠太郎の突撃を受け止めたり、おばあちゃんに挨

拶しながら、ほのかの部屋に行ったら、入り口にゆかたがかかっている。それも、2着。

「え？これ？」

「おばあちゃんが用意してくれてたみたい」

ほのかはクスクス笑っている。あのおばあちゃん、ほんと、謎なひとだよなあ。

それにしても、ほのかって細いなあ。

障子閉めて、制服脱いで、着替え途中のほのか見て、あたしは心から思った。

「ほのかさあ、ごはん、食べてる？」

「食べてるわよ。お昼、見てるでしょ？」

まあ、ねえ。別に他のコより少ないようにも見えないけどさ。

でも、ねえ。おなか、ぺったんこだよ。

こんなおなか、あんなヤツらに殴られたり、蹴られたりしてゐるんだよね。いっくら変身してる、っていつても、さ。

「ほのかぁ」

「ん？」

ほのかが、こつち振り返った。ゆかた、はおりかけのままです。

「後悔、してる？」

あたしが言ったら、ほのかはしばらくきょとんとしてた。でもいきなり、ほのかの目がいたずらっぽくなくて、

「そう見える？」

ってひとこと。あたしは横に首振った。見えないよ、たしかに。

「わたしね、いろんな経験できたと思うわ。普通の人じゃ考えられないくらい、いろんな経験。もちろん、イヤな経験はしたくないけど。」

でもね、いっしょに経験してくれる、なぎさがいるじゃない？ だから、後悔はしないわ」

はぁ。なんだか、ほのかがまぶしくって、見てられないよ。 下着姿だけだよ。

「さ、着替えちゃいましょ♡」

あたしが借りたゆかたは、白の地にオレンジ色のひまわり柄だった。下帯まで結んで、ほのかの方見たらもう帯を締め終わってるどころ。ゆかたは紺の地に白いすずらん

「うん？ なぎさ、なに笑ってるの？」

あちゃ。見つかっちゃった。

「なんかさ、いつも色が逆だな、って」

いつもはあたしがブラックで、ほのかがホワイトだもんね。

「そういえばそうね。でもなぎさ、ひまわり似合ってるわよ♡」

はいはい。どーせ、子供っぽいつて言いたいんでしょ？

「ひまわりはね、まっすぐ太陽を見つめるでしょ。なぎさみただな、って思うの」

うう。 やっぱ、ほのかってストレートなのよね。

あたしにはとても ても。

「すずらんはずっと下向いてるね」

「そういうこと、言わないの！」

ほのかが苦笑いしながら、両手振り上げて。うん、違うよ。

「でもさ、なんか明かりみたいじゃない。みんなの足元を明るくしてくれるの。ちょっと、ほのかっばいかも」

あ、赤くなった。あたしの勝ちかな

「あー」

「いいけどいいけど。あたしたちも、いるんだけどな」

いきなり声が出て、あたしもほのかもビックリして跳ね上がった。見回したら、障子の隙間に顔が二つ

「志穂、莉奈！どっから覗いてるのよっ!!」

「障子に目あり〜」

実践するな、ってば。まったく。

「っていうか、っていうか！花火、もうじき始まっちゃうよ？ なぎさ、まだなの？」

ええっ、もうそんな時間!?

「ほのか、どう？」

後ろを見たら、ほのかがあたしの分の帯と格闘してた。こりゃ、そう簡単には終わらないよね。あたしは、志穂たちに向き直って、

「あたしが足引っ張っちゃってるからね。ふたりとも、先行っててくれる？」

やっと着付けが終わったのが、それから15分後。あたしたちはまた忠太郎の突撃よけながら、ほのかの家から走り出ってた。

「なぎさ！ちょっと速すぎよ!!」

ほのかの手を引っ張って走ってたら、後ろから抗議されちゃった。でも、急がなきゃ。

「ちよつとなぎさ、聞いている?」

ちよつとだけ振り向いたら、ほのかがむくれてた。

あたしは心の中で謝ったけど、でも。

「ちやんと最初から見なくちゃ。大丈夫、きつと間に合うから」

間に合わせる。いま味わなくちゃ。きれいな火花を、いい経験を、絶対に!

「なぎさ!前!!」

え ?

言われて前を見たら、黄色い看板が見えた。

足元に、硬い地面が、なかった。

くうっ、い、いたたた

気がついたら、背中と腰が痛い。そうか。あ

たし、落ちちゃったんだ。工事中の穴かなにかに。

痛いけど、折れてるとか、って感じじゃないな。だ

けど、目を開けてもまっくら。なにかの下敷きになっちゃったみたい。

そういえば、ほのかは? まさか、いっしょにって

ことは !?

「ぼぼば?べ?」

あれれ? 口がふさがっちゃって、まともにしゃべれないよ。顔の上にも、なにか乗っかっちゃってるんだ。

あ、目が慣れてきた っ、ちよつとお!!

「べぼ!」

ほ、ほのかの顔? っっていうか、口? っっていうか、

つまり これって

「ぶ、ぶぶぶ!」

ちよ、ちよつとほのか! 気がついてないの?

あ、ああ、目え開けてくれた。 っ、こちら!

なんでまた閉じるのよあつ!?

「ぶぶぶぶぶぶつ! ぶ! ぶつぶー ぶはっ!」

はあ。やっと顔がはなれたわ。ああ、苦しかった。

「あら、もうおしまい？」

ほの〜かあ〜っ!!

「どうしてやめないのよ！」

「なに言ってるのよ。わたし抱えてるのはなぎさでしょ？」

え？ 言われてみると、手が うわっ！ あたしほんとに、ほのか抱きかかえちゃってるよ!!

「なんだか、気持ちよかったし なぎさなら、ま、いつか、って」

しっかりと抱きしめた形の手をほどいて、ほのか起き上がらせた。痛い、って顔しなかったな。よかった。

落ちたとき、無意識に抱いちゃったんだろつな。えらいぞ、あたしの腕！

「なぎさ、大丈夫？」

ほのかの声の後ろで、ボンっていう音がした。いけない！ 花火、はじまっちゃったんだ。

「痛ッ!!」

立ち上がろうとしたけど、腰が動かなかった。

「しばらく、休みましょ」

しばらくして、痛いのもだいぶおさまった。けど、ほのかがあたしのわきに座って、立とうとするたびに両肩押さえ込むんだもんなあ。

あたしたちが落ちてきた穴、その向こうはもう真っ暗で、ときどき花火の端っこが見える。ここが使われてない水道のトンネルで、落ちた割には汚れてない、つてのはいいんだけど。

「ありえない。こんな花火見物なんて」

ほのかの作った花火も見れないし、これじゃ思い出にならないよ。

「あゝあ。計画の最初っからケチついちゃうんだもんなあ」

ぼそつ、とひとり言のつもりだったんだけど、言った瞬間に、空気が寒くなった。

「な・ぎ・さ・さ・?」

ぎくつ。この、言い方は

「なんの計画立ててたのかな? 素直に言うなら今のうちよ?」

「え?」

計画、って ま、まさか、ね。

「な、なんのことがなあ、いって! 痛い痛い痛いって!!」

いきなり両耳つまんで うああ、痛いっつ!!

「いつまでもとぼけてるからよ。『焼きほのか計画』ですって? もう 知らないでも思った?」

なんで名前まで って、志穂以外ないよ。あいつめっ。

「いや、だからこれはその、ほのかのこと考えて

痛っ!」

「だ〜から! それを言わないで始めちゃうのがいけないの!!

さっき、ここに落っこちたのはだあれ?」

う ん。その結果が、これだもんね。

あたしは、ひとつ大きく息はいた。

「だつてさ、言ったら絶対『大丈夫』って答えるじゃない? たとえ無理でも、ほのかつてさ」

八つ当たりもいとこだよ、あたし。もう、子供っぽいつたら。ほら、なんとも言いなさいよ。

「無理してるの、なぎさの方じゃない? え? なに?」

「む、無理って」

「なぎさはみんな、できるだけ早くやりたいのよね。あの敵 イルクーボがまた襲ってくる前に?」

あ あたし、思わず顔そむけちゃった。ほのかの顔、見れない

「やっぱり」

「いや だつてさ」

なんて言えばいいか考えてたら、ほのかがあたしの前に回りこんできた。

17 はなび あがった？

「戦う前に楽しいこと全部しちゃおう それって、最後の思い出になるように、ってこと？」

また横向いたら、今度はあたしの顔、ほのかの両手でおさえこまれちゃった。

「そんな、こと」

「あるわよ！ そうじゃないなら、どうしてこんなに急ぐの？ あせるの？」

夏休みは、まだ一ヶ月以上あるのよ!!」

だめだ、逃げられない。そう思ったら、自然に言葉がこぼれてきた。

「ほのかは、あいつが怖くないの？」

「怖いに決まってるわ!!」

え？

「考えただけで、からだが震えるわよ。あきらめたら、どんなに楽だろう、って何度も思ったわ」

う、うそ？

「でもね、わたしが勝手にあきらめちゃったら、やられるのはわたしだけじゃないのよ？ それだけは

絶対にイヤ!!」

あつて、思わず叫んじゃうとこだった。

そっか。なんてバカなんだ、あたしは！ そうだよ。あたしがほのか心配してるのに、ほのかがあたし心配しないはずないじゃない!!

「えっと、その ごめん」

弱いなあ、あたし。ほんと弱いよ。おなががべたんだなんて関係ない。

下げたあたしの頭に、なにか当たった。ほのかがおでこくっつけてきたんだ。

「いいの。そのかわり、もしわたしがあきらめそうになったら、思い出させて。なぐってもいいから」

弱いあたしが？ って、思わず言いそっになっちゃうんだけど、

「あたしも、またあきらめちゃうかもしれないよ。いいの？」

それだけ言ったら、ほのか顔上げた。

「信じてるわよ。 偶然キスしちゃっても、平気

でいられるくらいはね♡

うあ。そうきたか。

「なぎさは？」

にっこり笑って、ほのかが訊いてきた。

「そ、そのくらい、気にしないわよ。あたしだって」

目を閉じて、勢いだけでもそう言っしかないじゃない。「こは、さ。」

「そっ？？じゃ」

目を開けたら、ほのかの顔があった。

「ちよつと、ほのか」

目をつむったほのかが、ゆっくり近づいてくる。

「ほのか、あたしができないと思って、からかってるでしょ？」

薄目あけて、少し口元で笑いながら、あと5cm

「知らないよ、もうー」

んっ

「おい、なあ〜ぎさあ〜？」

どっから小さな声が聞こえたたん、あたしの手が勝手にほのか押してた。今の声、だれ!?

「莉奈！もちよつと待とう、って言ったのに！」

痛た。志穂の聲が、耳の奥までキーンって響いてるよ。トンネルで大声はシャレにならないって。

「志穂？莉奈？」

見上げたら ああ、あたしたちが落ちたところから顔出して、こっちのぞいてるし。

「遅いから、探してただけさあ」

「な〜にやっつてんのつかなあ〜？」

ふたりして、ニヤニヤ笑い。ああ、ありえない

え、と

「来てみる？ここからだともりが暗いから、きれいに見えるのよ？」

おお、さっすがほのか。そうそう、こうなったら

19 はなび あがった？

ウンチクでなんとか

「ところで 化学部の花火、もう上がった？」

へ？ ほのか、それじゃモロバレ って、なにニ

ニコしてるのよ、あんたはっ!!

「言ったでしょ？ わたしは平気だって」

ああ、上でニヤニヤ、となりでニコニコ こん

なの、こんなのおっ！

「ありえなあく！っつ!!」

—おしまい—